



Aristcrat

当時最も人気があった上級機「Regency」と同じ時期に開発された小型の高級システム。フロントのデザインは「Regency」に似ているが、キャビネット構造はこのシステム特有のクリップシュ型のバックロードホーンシステムが採用されているため、小型ながら伸びのある低音再生を可能にしている。ユニット構成は30cm 2ウェイ・コアキシャルユニット12TRX がスタンダードな組み合わせだが、12WウーファーにT35、T25 / 8HD を搭載する3ウェイ構成も可能である。



「Regency」を正面から見たところ。グリルは真鍮の飾りが美しく、横に倒して下に引き下ろすとユニットパツルが見えてくる。両サイドはスリットになっており、簡略型の低音用バックロードの開口部がみえる。箱を部屋のコーナーに設置すると低音開口部から放出される低音が壁によって増幅される。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今回はエレクトロヴォイスの中型システム「Regency」と「Aristcrat」を紹介しよう。

第35回 Electro Voiceの中型システム

本誌の56号でも紹介した Electro Voice 社は1927年アメリカのルイジアナ州サウスベントに設立され、欧米のオーディオ全盛期である1950～60年代に人気を博したアメリカ東海岸を代表するスピーカーメーカーで、JensenやBozak と肩を並べる存在だった。1950年代に入ると家庭用的高级オーディオで各社が競い合う時代になりElectro Voice 社も大型の PatricianやGeorgianをはじめ、大小さまざまな美しい家具調のスピーカーシステムを開発している。

本文 / 田中伊佐資

製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)



Regency

Regency は1954年頃にPatrician のような豪華な真鍮の飾りをまとった家庭用の中型システムとして開発された。キャビネットは後ろの両コーナーが斜めに角度を付けたコーナータイプで、内部は簡略されたバックロードシステムになっていてユニット構成は38cm ウーファーを搭載した2ウェイまたは 3ウェイのシステムとなる。その組み合わせは数種類あり、当時はユニットをセミオーダー的に選ぶことが可能で、38cm コアキシャル2ウェイユニットの15TRXがスタンダードなシステムで、これにT-25 / 8HD を付けた 3ウェイタイプや15W ウーファーに単体で T35 トゥイーター、T25 / 8HD ホーンドライバーを搭載するシステムも可能だった。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Electro Voiceの中型システム



3,500 HzでクロスするT-35 トゥイーターの専用ネットワークX-36

800Hz でクロスするT-25 / 8HD ホーンドライバーの専用ネットワークX-8

「T-25 / 8-HD Horn」。上級機の patrician にも搭載されているミッドレンジホーンドライバーでT-35トゥイーター同様に金属製ではない樹脂製のフェニリックダイアフラムが採用されているため、耐久性も高く滑らかな音色が特徴である。

「15TRX / 12TRX」。38cm コアキシャルユニットであるSP-15 / SP-12 タイプのウーファーのセンターに T35 トゥイーターを搭載。初期型は外付けのX36ネットワークが付属し、後期型はマグネットカバー内部にネットワークが内蔵され、アッテネーターが付属している。

いまから25年くらい前、エレクトロヴォイスからアリストクラットなるスピーカーが発売されて、少々興味を持ったことがあった。その頃はちょうど2ウェイのホーン型スピーカーに憧れていた時期だった。それを買うのは予算的に無理だったが、未練なく決別できたのは、ショップの人から、元はオリジナルモデルがあつて名前を踏襲したことを教えてもらったためだ。なんだ二番煎じかよと青臭いこだわりが僕にはあつた。

この連載を続けているうちに、いつかは少し思っていたが、ようやくその「二番煎じ」にお目にかかることができた。まずプロポーションがいい。

このころ、スピーカーの大きさは、ひなびた温泉旅館の冷蔵庫くらいが程よいという思いが募っている。そのことを人に言うとデッカイの使っているくせに、よく言うよみたいな顔をされる。オーディオは上昇飛行から水平飛行に入ったとき(いまの自分)、システムはその人の無理がないサイズへ自然に収斂されていくように思うのだが、摂理としてはどうなのだろう。まあともかく、アリストクラットの量感感は僕の好みである。

さっそく音出しを始める。ヴィンテージ・システムの難関ともいえるECM録音に決める。キース・ジャレット・トリオの「イエスタデイズ」をかける。

意外にいいのではなく、そのまま普通がいい。30cm同軸2ウェイだから、そんな

な高音が出ていくわけではないはずだが、ドラムのシンバルはしつかり伸びている(あるいは伸びているように聞こえている)。このトリオはインタクトプレイが持ち味。3人がばらけずに一体感を保持して前に突き進んでいく感じがちゃんと出ている。

再び苦手と思えるロックでイエスの「ロンリー・ハート」を聴く。これは逆に重たいベースが出るかどうか。まったくヴィンテージっぽくない、パシバシとビートが決まって痛快だ。

次にスピーカーをもう一回りか二回り大きい、同じエレボイのリージェンシーに変える。そのままイエスを聴いてみる。アリストクラットの小気味がいい鳴り方もいいが、さすがに15インチウーファーには余裕がある。同じ曲なのに、あたかももつと大腿で歩いているようなテンポに感じる。

エレクトロヴォイスというくらいだから、声を聴かないと終われない。中島みゆきのライブ「歌旅」から「ホームにて」をかける。両スピーカーに共通している点をはっきり意識するのだが、音がこちら側近くにあつて、もろに実在感がある。そして声、旋律、歌詞が真に迫ってくる。取材を忘れて、曲のなかに入ってしまったジーンとなった。素晴らしいオーディオほどその存在を意識させないものだ。リージェンシーにとって皮肉な時間

まさに好みのサイズ感で
実在感をもろに生み出す